希望へと至る苦難（チャペルメッセージ⑦）

このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。　（新約聖書・ローマの信徒への手紙 5 章 1～5 節）

私たちはそれぞれの人生の歩みにおいて様々なことを経験します。もちろん楽しいことばかりでなく、時には、悲しいことや辛いことも経験するでしょう。しかし、様々な悩みや苦しみはあったとしても、少しずつ前に進んでいくことができるのは、何らかの希望をもっているからだと思います。その一方で、しばしば指摘されているように、今日、様々な理由のために日本の若者たちにとっては希望を持ちにくい時代になっているのかもしれません。

今回取り上げた聖書の箇所はパウロという人物によって記されたものですが、彼はもともとユダヤ教の熱心な信奉者であったにも拘わらず、人生の半ばでキリスト教の宣教者として生まれ変わり、その後は、キリスト教を当時の地中海世界全体に広めていくという大きな働きを成し遂げた人物でした。しかし、彼が記した手紙にも記されているように、その宣教活動は決して順調だったわけではなく、各地で反対に遭い、迫害を受け、投獄され、仲間であるキリスト者からも非難、攻撃されるなど、想像を絶するような苦労があったようです。

今回の聖書の箇所でパウロは、たとえ今は困難な状況にあるとしても、将来は救いへと招き入れられるという希望をもっており、そのことを誇っていると述べていますが、驚くべきことに、将来の希望だけでなく苦難をも誇っていると断言しています。苦難と希望、常識的にはまったく正反対の概念のように思われ、むしろ苦難は絶望を生み出すのではないかと考えられますが、彼は苦難こそが本当の希望を生み出す源泉だと語っているのです。

確かに、私たちが、それぞれの人生において失敗や挫折を全く経験しないのなから、私たちは本当の意味で成長できないのかもしれません。壁にぶつかって初めて私たちは自己を振り返り、その困難な状況を何とか克服しようという思いが与えられるのであり、失敗や挫折を経験して初めて、自分を省み、改めていこうとするきっかけが与えられるのかもしれません。もちろん、挫折や失敗は出来ることなら避けたいところですが、どうやらこのパウロの言葉は、そのような経験は決して無意味なものではなく、むしろ私たちを成長させ、私たちの人生を豊かなものにしてくれるということを訴えようとしているようです。

苦難は希望へと至る。だからこそ、心の底から苦しむことなくして本当の意味での希望もありえない。苦しみを経験することによって、真の希望が見えてくる。私たちもそれぞれのこれからの人生において、様々な挫折や苦しみも時には経験すると思いますが、まさにその苦しい時こそが、自分が成長する最大のチャンスにもなり得ることを覚えておきたいと思います。